

Circumcision in Transition 「割礼の変容」

文化科学研究科・比較文化学研究専攻 南出 和余

Circumcision in Transition 「割礼の変容」

文化科学研究科・比較文化学研究専攻 南出 和余

報告者は、博士論文のテーマである、子どもの生活世界や社会化の過程における現代的变化を捉えるなかで、調査地バングラデシュ農村社会の子どもの通過儀礼である「割礼」の変化を映像によって記録した。「通過儀礼」という時間的・空間的にある一定の枠をもった非日常の場を包括的に捉えるには、映像による収集が有効であると考えたからである。さらに、総研大に入学して以来、大森康宏教授の映像実習への参加をきっかけに、映像人類学の可能性について学んできた。こうした調査と学びの成果として制作した映像作品“Circumcision in Transition”は、「第20回パルヌ国際ドキュメンタリー&人類学映画祭」にて上映され、同映画祭にて2006年度の科学ドキュメンタリー最優秀賞を受賞した。



制作者：南出和余
 撮影・録音・編集：南出和余
 制作年：2005年
 制作場所：日本
 撮影場所：バングラデシュ・ジャマルプール県
 撮影時期：2003年1月～2月、2005年8月
 長さ：36分

バングラデシュ農村社会のムスリムの家に生まれた男児たちは、7, 8歳頃になると割礼を行う。割礼は、「ムスリムになる」あるいは「一人前になる」ための通過儀礼として行われる。近年、近代医療や学校教育の普及、経済成長などによって、割礼にも変化が見られる。

制作者は、2000年から継続的に行っている子どもの生活世界に関する調査の一環において、子どもたちの割礼儀礼に招待された。その際、制作者と、子どもとその家族の間で、儀礼の一部始終を映像に収めることを決定し、撮影に到った。本作品では、ある農村で行なわれた2人の男児の割礼の様子から、その変容ぶり、そして彼らが考える割礼の意味を捉えたい。

人類学的視点の重要性を認めるこの映画祭では、本作品における、被写体である子どもと撮影者との関係が受賞評価の対象となった。また一方、「割礼」というテーマは、報告者の予想を越える議論を呼ぶことになった。まず日本での反応は、伝統的方法と近代医療による方法の相違、一概に近代医療が好まれているわけではないことに関心が寄せられる。それに対してエストニアをはじめとするヨーロッパでは、一部の人びとは割礼の慣習をおこなっており、また割礼に対する賛否が既に社会の中に存在する。そのような社会では、本作品は子どもの通過儀礼という側面よりむしろ、割礼という行為そのものをめぐる議論を呼んだ。さらには、人権問題の視点から注目されることの多い女子割礼との対比によっても捉えられる。

このように、言語の壁を超えてダイレクトに伝えられる映像は、その社会の関心によってさまざまに

解釈され、ときに制作者の意図とは別の文脈で使われ得ることがある。映像が制作者の手を離れるとき、そうした異なる解釈をどのように捉え、いかに映像に責任を持つことができるだろうか。本来、人類学映像の特徴は、当該地域の人びとの視点（大切にしているもの）を描き出し、彼らにとっての意味を尊重することにある。人類学者がそれをどう伝えるか、映像というダイレクトな情報をめぐって、当事者—人類学者—視聴者の関係をいかに築くかという、民族誌映画のメッセージ性を今後議論していく必要性があると考えられる。